

富山大学 令和元年度卒業論文

吃音者の当事者団体と個人の語り——物語論的分析——

富山大学人文学部人文学科
社会文化コース 社会学分野
学籍番号 11610165
氏名 村田友香

目次

第一章 問題関心	1
第二章 吃音症とは	2
第一節 音声症状	2
第二節 その他の「症状」	3
第三章 当事者団体について	4
第一節 NPO 法人全国言友会連絡協議会とは	4
第一項 理念	
第二項 活動	
第二節 ういーすたプロジェクトとは	6
第四章 先行研究	7
第一節 スティグマ	7
第二節 相互行為上の<気詰まり>	8
第三節 物語の種類	9
第四節 本論文の着眼点	11
第五章 調査報告	12
第一節 「気持ち的には昔に比べて喋りやすくなったかな」：Aさんの語り	12
第二節 「言友会に入ってカミングアウトが怖くなくなった」：Bさんの語り	15
第三節 「自分の強みをどうつけるか」：Cさんの語り	19
第四節 「吃音で恥ずかしいと思いながらも、どうやって生きていくか」：Dさんの語り	22
第五節 「どんなことが起きてても悲観しないことかもね」：Eさんの語り	25
第六章 分析・考察	28
第一節 どのような物語を語ったか	28
第一項 「症状改善」の物語	
第二項 「開示」の物語	
第三項 「後景化」の物語	

第四項 「出会い」の物語	
第五項 まとめ	
第二節 新たな開示の語り方	31
第三節 「ためらいの声」との折り合いのつけ方について	33
第一項 吃音を肯定的に語ること	
第二項 吃音者としてのアイデンティティの根深さ	
おわりに	36
注	37
参考文献・URL	38

第一章 問題関心

障害の一つに吃音症というものがある。吃音症とは、話すときに詰まってしまうたり、どもってしまうたりして、流暢に発話ができない流暢性障害である。また、筆者自身も当事者である。

吃音症には治療もなく、なぜ発症するのかも不明である。このような障害をもった人たちが集まりできた当事者団体がある。その中でも、日本最大の当事者団体である「言友会」、そして近年新しくできた「ういーすた」が全国組織として存在する。

当事者団体に参加している個人はそれぞれどのような物語を語るのか。彼らにとって当事者団体に参加する意味とはなんなのだろうか。本研究ではそれを明らかにしていきたい。

第二章 吃音症とは

第一節 音声症状

吃音症の症状は主に三つある。(井上 2016)

①難発性吃音 (ブロック)

言葉そのものを発するときに詰まってしまう型。

(例:「・・・っおはようございます。」)

②伸発性吃音

最初の一音が伸びてしまう状態。

(例:「おーーーはようございます」)

③連発性吃音 (間発性吃音)

同じ単語や音を繰り返して発音してしまう型。

(例:「おおおはようござございます」)

なお、症状は人それぞれであり、一つだけに当てはまる人もいれば、三つとも混合している人もいる。症状の出方として、緊張する場面で出やすい人もいれば、リラックスしている時に症状が顕著にでる人もある。また、決まった文章を読むのが苦手な人もいれば、考えながら話さなくてはいけない場面が苦手な人もいる。症状には波があり、症状が出やすい時と出にくい時がある。

第二節 その他の「症状」

吃音には主な症状に付随して、次のような「症状」が伴う。以下は日本吃音臨床研究会（2019）に依拠し、それをまとめたものである。

①随伴運動・随伴症状

不自然に体を動かしてしまう。

吃っている状態から抜け出すためにしようとした動作が身についてしまったもの。

②回避

（吃音症状の悪化によって吃音に対する意識が強まることで）どもりやすい言葉や、苦手な行を話さないように、しゃべらないようにする。

回避が強まれば強まるほど吃音は悪化していく。

③情緒性反応

吃るかもしれないという予期による不安により、また、吃ったことによって、表情や態度に変化が起こる。

自分の吃音にどの程度敏感になっているかによって、この反応は変わる。

[例]

表情：赤面、こわばる、当惑

視線：そらす、チラッと見る

態度：虚勢、攻撃的態度、おどけ、恥ずかしそうな態度、落ち着かない

行動：恥ずかしそうに笑う、いらつく、せきばらいする

話し方：先を急ぐ、小声になる、単調になる

④工夫

吃らずに話そうとするために行う工夫。

[例]

延期：間をあける、回りくどい表現をする、「アノー」「エー」などを入れる

助走：話すスピードを速める、語音に弾みをつける

解除：一度話すのをやめて、再び試みる

第三章 当事者団体について

この章では吃音者の当事者団体について、その団体の概要をまとめていく。

第一節 NPO 法人全国言友会連絡協議会とは

NPO 法人全国言友会連絡協議会（以下全言連）は、吃音（どもること）がある人たちのセルフヘルプグループとして、1966年に設立された。2019年10月現在、全国各地に35の加盟団体を擁している日本最大の当事者団体である。47都道府県のうち、言友会が存在しない都道府県は「15」ある（青森県、岩手県、秋田県、山形県、福島県、滋賀県、鳥取県、島根県、山口県、徳島県、香川県、高知県、長崎県、宮崎県、沖縄県）。以下では、全国言友会連絡協議会（2018；2019）に従ってまとめる。

第一項 理念

全言連は「吃音があっても豊かに生きる」という理念を持っている。どもることは話し方の特徴でしかなく、それによって優劣が決まることはない。100人に1人という決して低くはない有症率であるにも関わらず、自分以外の吃音者に会ったことがなく、1人で悩む人も少なくない。それは吃音は工夫や回避によって症状も隠すことがある程度可能だからである。

流暢に話せないことや、吃音のことを周りに相談できないことから、吃音は恥ずかしいもの、自分は劣っているという間違った自意識に陥っていくことにもなりかねない。

参加者がお互いに体験を話し合うことで孤独から救われ、さらに「吃音のある自分」が、ありのままでも他者や社会に良い影響を与える力を持っていることを実感することができるようになる。その結果、「劣ったもの、恥ずかしいもの」という自意識が前向きに変化していくことこそが、セルフヘルプの持つ力なのである。

第二項 活動

基本的に定期的に例会が開催されるが、各地言友会ごとに活動内容は様々である。以下は全言連が行っている活動内容である。

・吃音ワークショップ（全国大会）

関東・中部・中四国・九州で定期的に地域合同のブロック大会を開催しているほかに、年1回、「吃音ワークショップ」（全国大会）を開催している。

「吃音ワークショップ」では、全国各地から吃音がある人が集結し、様々なテーマを巡る分科会を通して吃音に対する考えを深める機会を提供するほか、言友会の総会を開催している。

・職業データベース・吃音者生活実態調査

各地言友会の有志からのアンケートを集計し、吃音を抱えながらも社会で活躍する人々の声をまとめた「職業データベース」を構築してきた。今後は蓄積された情報を活用して、吃音がある人にとって必要な

合理的配慮のあり方について提言することを目指していく。

- ・小中高校生の吃音の集い

吃音がある人にとって、悩める思春期は 人生において大きなターニングポイントとなる時期であるため、言友会では関東で 「小中高校生の吃音のつどい」を定期的開催している。

各地言友会でも同様の趣旨の企画が定期的開催されている。

- ・成人吃音臨床研修会

吃音を診ることができる医療機関は少なく、特に「ことばの障害」のリハビリを担当する言語聴覚士の中には、吃音臨床を苦手とする人も少なくはない。そこで、言友会が言語聴覚士⁽¹⁾向けの研修会を開催することで、吃音がある人の受け入れ先増加を目指している。

第二節 ういーすたプロジェクトとは

ういーすたプロジェクト（以下ういーすた）は、吃音がある若者のための自助の集まりで、2014年に京都で活動を開始して現在、関西・関東・東海・九州・北陸地区等で活動を行っている（ういーすたプロジェクト 2019）。年会費・入会費はない。全言連とは基本的に友好的な関係であり、イベントの際はお互いが協力して行っていることも多い。

参加者は10代～30代の吃音がある人で、地域にもよるが、大学生や20代の人が大半の地域が多い。若者だけであるため参加しやすく、悩みを共有しやすいという特徴がある。

ここからは筆者の持論になるが、ういーすたは会員制度でないため行きたいときだけ行くことができ、言友会と比較して気軽に参加することができると思われる。

またういーすたは、吃音で悩んでいる人のために、お互いに悩みを話したり、何気ない会話に花を咲かせたりすることができるような、お互いに「分かち合う」ことができる「居場所」を提供することを目指している。

活動は地域によって内容は異なるが、定期的に例会やカフェ会などを開催している。また吃音がある人だけでなく、その周囲を巻き込んで様々なイベントの企画もしている。ことばの教室⁽²⁾の吃音児やその両親との交流会、言語聴覚士養成校に通う学生との交流会、吃音を研究している方に対する研究・調査協力など、その活動は多岐に渡る。言友会とも連携を図り、言友会の全国大会や地方大会にも積極的に協力している。

また、ホームページでは主にういーすたに参加した吃音がある人の、就職活動・就労に関する体験談を掲載している。名前等の必要事項を記入し指定のメールアドレスに連絡をすることで、体験記の回答者とメールで相談することも可能。

本論文では、ういーすたがもつセルフヘルプグループの特徴については分析できない。その代わりに、言友会やういーすたへの参加を経験した人はどのように自らの物語を語るのかに焦点を当てる。

第四章 先行研究

この章では、吃音の社会学研究の中でも相互行為論的研究を行っている論者、そして物語的研究を行っている主要な論者を取り上げる。

第一節 スティグマ

アーヴィング・ゴッフマン(1963)によると、スティグマとは、それをもっていると否定的な意味で普通とは異なる人と見なされてしまう、または見なされてしまい得る属性のことを指す。スティグマは、異なった三つの種類が存在する。

- ①身体障害、醜悪
- ②個人の性格上の欠点 (LGBT、薬物依存、アルコール中毒、精神病等)
- ③人種、民族、宗教等集団的な要素

スティグマには共通する特徴がある。それは「個人が、われわれの注意を惹き、出会った者の顔をそむけさせ、他の属性がわれわれにもつ要請はそれがあるため無視されるような、しかもそれさえなければ彼は問題なく通常の社会的交渉で受け容れられるはずの一つの性質をもっている、ということである」

(1980:15)。

そして吃音は可視性のあるスティグマに分類され、吃音それ自体がスティグマがあることをしばしば開示してしまう性質をもつ。

第二節 相互行為上の〈気詰まり〉

渡辺 (2003) は、アーヴィング・ゴフマンを手掛かりとしながら、吃音を相互行為上の〈気詰まり〉とし、それを回避する様々な方法を考察している。ここでの相互行為とは、主に吃音者と非吃音者間での会話を指す。

この〈気詰まり〉には客観的な兆候と、主観的な兆候がある。客観的な兆候とは、吃音の症状のように視覚や聴覚で確認される身体動作のことである。主観的な兆候とは、症状が露見することによって生じる「当惑」のことである。

「言い訳」、「謝罪」、「はにかみ」など、他者への〈表敬⁽³⁾〉を表出する「修復的交換」と、言葉の言い換えや、相互行為（会話）の不参加など〈気詰まり〉を回避しく品行⁽⁴⁾を保つ「補助的交換」に分類されるとした。

修復的交換からは「吃音者が直面する困難とは、表敬を表出したくても、その場にふさわしい表出ができない場面にある」（渡辺 2003: 183）。吃音者は、「言い訳」をすることが難しく、「謝罪」を表出することができない困難に直面している。

この〈気詰まり〉は相互行為によって生じるものであるため、全ての要因が吃音者にあるわけではない。〈気詰まり〉が起こることで“滑らかな”相互行為が浮き彫りになる。吃音者はその“滑らかな”相互行為に参入するために言い換えをしたり、そもそも相互行為に参入しない方法を選択したりすることもある。「それはまるで、吃音者は自発的に他者との相互行為に参入しないように仕組みられているかのようでもある」（渡辺 2019: 147）。彼らは吃音を自覚しているがゆえに、そうせざるを得ないのである。

ここで、第二章第二節で挙げた「症状」の①随伴運動・随伴症状と③情緒性反応は修復的交換を難しくする要素であるが、②回避と④工夫は渡辺のいう補助的交換に含まれると考えられる。補助的交換については、相互行為上の〈気詰まり〉を回避する手段として用いられることもある。従って、「症状」とされるものであっても、必ずしも全て治すべき悪いものではないと考えられるだろう。

第三節 物語の種類

伊藤（2005）はセルフヘルプグループの参加者が物語を産み落とすことで新しい生き方を実現しようとする点に、セルフヘルプグループの根本的な特質があると考えます。セルフヘルプグループとは、何らかの問題を抱えた当事者たちが相互に支え合うための活動を行う集団のことであり、多様な物語が許容される場である。セルフヘルプグループの物語のタイプとして、「回復の物語」というものがある。これは、「元々健康な状態から病気になった。しかし、また元の健康な状態に戻るであろう」という基本的な筋書きのある物語である。

言友会の例会へ参加し、そこで語られる物語を分析した。言友会で語られる物語は大きく二種類に分けられる。

- ・「苦境の物語」：否定的な評価によって主人公の位置が「安定的」もしくは「後退的」であるもの。
（例：発声練習をやっているがうまくいきません。）
- ・「前進的」な物語：主人公の位置が上昇するもの。
（例：辛かった時期もあるが、今は昔と比べて良くなりました。）

また、「前進的」な物語にはさらに四つのカテゴリーを設けることができる。それぞれの事例を含め紹介する。

- ① 「症状改善」の物語：年齢を重ねるごとに症状が軽減されてきたという筋をもつ物語。

例：「手話やカラオケ、詩吟などを続けることで、いつの間にかよくなってきた」「吃音とは関係のない症状を抑えるための服薬によって吃音症状が軽減した」（伊藤 2005： 8）。

- ② 「開示」の物語：吃音を打ち明けることや、症状を隠さないようにしているという筋をもつ物語。

例：「主人公は吃音を治すことばかり気にして生活を送っている。ひとりきりのときには発声練習を試みたりイメージトレーニングを試みたりするが、学校につくと友達との会話で吃音が出ないようにひたすら気をつけ、授業中は先生に当てられないように下ばかり向いている。精神的に追い込まれた主人公は、ある日、一番仲のいい友人に「本当に洗いざらい」打ち明ける。すると友人は、話を黙って最後まで聞き遂げ、その後で変わらぬ友情を約束する。主人公は「やりたいことはすべてやる」ような人へ変わる」（伊藤 2005： 8-9）。

- ③ 「後景化」の物語：何らかの出来事によって、「吃音者」のアイデンティティが相対的に後景に退くという筋をもつ物語。

例：「主人公は実業高校の就職コースにいたが、自分の吃音を「これさえなければ他のやつらと勝負

できるのに」と思っている。そして、吃音を治してから世に出ようと大学に入るが、そこでもうまくいかず、一ヶ月で大学をやめてしまう。高校時代の恩師に相談し、卒業生（先輩）が支店長である事務機会社に就職する。ある日、修理依頼のあった顧客の事務機を現地で直したことがあり、そのことは顧客をたいへん喜ばせた。ここで主人公は初めて「満たされたような」気分を味わう。そのうちに、吃音に対する考え方も「吃音を克服しないと絶対にダメなんだ」という考えから、「吃音があってもそれはそれ、別のところで社会の一員としてやっていけるのだ」というものへと変わる」（伊藤 2005: 9）。

- ④ 「出会い」の物語：吃音当事者やセルフヘルプ・グループとの出会いが、語り手に変化をもたらしたという筋をもつ物語。

例：「教室で他の生徒にからかわれたり、教師が不適切な言動をとったり、親が「吃ってはいけない」という接し方をしたりすることで、主人公は孤独になっていく。しかしセルフヘルプ・グループとの出会いによって「自分だけではないなあ」と思えたり、「落ち着く」感じを味わったりする。それによって主人公は生まれ変わる」（伊藤 2005: 9）。

このように、吃音者の生み出す物語は「回復」という結果がないため、「回復の物語」とは異なる物語をもち得る。また、前向きな物語を語る中に、やはりどこかで「回復」への夢を捨てきれずにいるということをもつ物語「ためらいの声」がある。

伊藤（2005）の事例は、Aさんは初め、吃音に対して正面から向き合うことを意識していると語る。「吃音を治すのが夢」ということや、「楽しく吃音にしばらくせずに」過ごすことを目標としているというような語りも見られた。その後の調査の中で、吃音に対する恐怖心について「いまはもう……ほとんど……うすれてきました」とAさんは語ったという。この「ほとんど」の前には短い沈黙があり、そしてその後には「ということはないですけど」という言葉が挿入されていた。

このような「ためらいの声」は、語り手が物語を語る中で、注意して注目しないと聞き逃してしまうようなものである。しかし、これは物語が「回復の物語」とは別のものであることを示すのと同時に、それに逆行する流れを作り出している。

第四節 本論文の着眼点

当事者団体への参加を経験するインタビューである語り手はどのような物語を語るのだろうか。彼らの語りに、伊藤（2005）のいう物語のタイプは見出せるのだろうか。本論文では、そのような着眼点をもとに物語的分析を行う。

そして、その中でも開示について特に考えてみたい。ゴッフマン（1963）によると吃音は可視性のあるスティグマであるため、吃音症状が露見することによって、吃音というスティグマを持っているということが開示されているはずである。その上で改めて自ら開示をするというその経験を、インタビューはどのように語るのだろうか。

また、伊藤（2005）の言う「ためらいの声」についても考えてみたい。「ためらいの声」は、前向きな物語を語る中にも、どこかで「回復」への夢を捨てきれずにいる葛藤の現れである。これは、セルフヘルプグループに参加をしても、解消できるものではない。それでは、参加者はその葛藤を抱え続けたまま生きていかななくてはならないのだろうか。そのことについても考察していく。

第五章 調査報告

今回は中部の吃音当事者団体に所属をしている五人に調査を行った。2019年6月、7月、10月に1時間～2時間のライフヒストリー的調査を行った。

第一節 「気持ち的には昔に比べて喋りやすくなっただけ」：Aさんの語り

Aさんは23歳男性で大学院生であり、ういーすた北陸、石川言友会、富山言友会に所属している。

Aさんが吃音を発症し、自覚し始めたのは小学校の低学年頃。症状としては、難発。詳しくは覚えていないが、小学1年生の音読の時間に「なんか他の子と違うな」と漠然と感じたそうだ。親は吃音のことを気にかけてくれ、担任の先生にも吃音のことを伝えてくれ、小学校5年生の時には、大学で吃音の研究をしている先生のところにも連れて行ってくれたという。親からは、「言葉のことで、大学で診てもらおう」というように言われて連れていかれた。親と先生が話し、Aさんは先生のところの学生さんと遊んでいた。終わった後、親からどんな話だったかというのを軽く説明されたが、その時「吃音」という単語は使われていなかったと思う、と語る。その時Aさんはそこまで吃音のことを気にしてはおらず、また、先生からも「時間が経てば良くなっていく」というような話をして頂いたことから、リハビリなどは行わなかった。

一方、小学校の先生たちは、国語の音読の文章量を少な目にするというような配慮をしてくれたという。周りの友達も、症状には気づいていたと思うが、話し方については何も聞かれなかった。

Aさんは、中学校に入学後、吃音を気にし始めたという。きっかけは中学1年生の時の最初の自己紹介。Aさんが通う小学校は1クラス10人いるかどうかという少人数だったが、中学校では1クラス30～40人程度の規模であった。今までそんなに大勢の前で自己紹介をしたことがなく、もともと自分の名前が言いにくいということもあったが、それに加えても緊張してしまい、ひどく吃音症状が出てしまった。その時に周りの子にからかわれ、そこから気にするようになってしまったという。担任の先生に相談をし、先生がからかってきた子に注意をしてくれた。その後からかわれることはほとんどなくなった。

Aさんは国語の音読や、古文の一節を暗記して発表しなければならない時、とても辛かったと述べる。難発がひどいため、延期（えーっと や あのー など）を話す前に発音すること）をしてもうまく話せない時、言い換えができないとどうしようもなくなってしまうからだという。そういう場面でうまくいかなかった際、家で音読の練習をしたりもしたが、それも効果が見られずやめてしまった。

Aさんは小学校のクラブチーム、中学校の部活でサッカーをしていた。その際、準備体操の時の掛け声をひとりずつしなくてはいけなかったので、苦労した。この時は特に周りに相談することもなく、頑張っ乗り越えた。高校の時はバドミントン部に所属をしていた。バドミントンは審判の時に声をださなくてはならない。1年生の9月頃までは自分で審判もやっていて、その間にみんな気づいてくれていたと思う、と語る。9月頃に初めての公式戦があり参加者が普段よりも多く、流石に困ったAさん。友達と世間話をしている時、部活の話に変わったタイミングで「実は自分にはこういう症状があるから、審判を代わってほしいんだけど・・・」と相談をしたところ、友人は快く代わってくれたそうだ。他の人からも特になにも言われなかったという。先生に報告などはしなくても良かったのでしなかった。

委員会は話さなくてもいいものを選んで入っていた。しかし、中学3年生の時、美化委員の委員長にじゃんけんで負けて選ばれてしまったという。各委員会の委員長は、全校集会の時に前で話をする機会があ

り、「これはもう、だめだ」と思って事情を話して代わってもらったことがあった。この時は先生に「言葉が詰まりやすいので、壇上に立って全校生徒の前で話すのは苦手だ」という旨を伝えた。その後、先生・Aさん・副委員長の三人で集まり、先生から副委員長に「委員長と副委員長を交代してほしいんだけど大丈夫か？」と伝えてもらい、快諾してもらった。

アルバイトは、大学2年生から3年生までの1年間、焼肉屋のキッチンでしていた。選ぶ基準はやはり話すことが少ないかどうかである。どもりながらも面接し、採用してもらった。「夜遅くまで残れるっていうことを伝えたから、それで採用してもらえたんじゃないかな」とAさんは語る。大学での実験、レポートが忙しく、通勤も時間がかかるため、やめてしまった。

研究室では、大学4年生の7月頃（「吃音」という言葉を知る前）、大学院の入試の面接のことで先生に相談をしにいった。そこで「言葉詰まるんで、なにかアドバイスとか、ないですか」と相談すると、「緊張するものは仕方ないし、時間はかかっても大丈夫だから、自分の思ったことを伝えるのが一番じゃない？」と言う風にアドバイスをもらったという。しかし同級生にはカミングアウトはしていないという。発表の時も難発がでても特に何も言われることもないため、「みんなも理解してくれてるんじゃないかな。だから特に言う必要もないかなーとかって思ったりはしてます。」と言う。

また、電話に関しては吃音者が苦手とすることのひとつである。Aさんはお店の予約等は、友達にやってもらっているが、どうしても自分でかけなくてはいけない時は、やはりとても緊張するようだ。電話をかけるのと受けるのではどちらが苦手なのか。

どっちとも苦手とは思うけど、一応・・・受けるほうが緊張するかもしれん。難発でずっと沈黙が続くと、なんか・・・申し訳ないとか、そういう気持ちになって・・・。掛けるほうは自分から掛けてるし、自分の都合に合わせてくれるっていうような感じに思ってるというか、そういう気持ちにはなってるかな。・・・受け取るほうは、向こうに合わせなきゃっていう気持ちがあって、なんかそれで緊張したりはします。

筆者は個人的には電話に関しては考え方が逆で、電話をかける方が緊張すると思っていたので、同じ症状、同じ電話でもこんなにも考え方が違うのだと驚いた。

日常生活では、お店でなにか注文をするときに苦勞する。メニュー表がある時は、指を指しながら「これください」と頼めるが、例えばコンビニのホットスナックコーナーのようにメニュー表が置いてない時は、注文するときにとっても緊張してしまう。食べたいものがあったても、言いにくいものは頼まず、言いやすいものを注文してしまうこともある。これは割と吃音者あるあるネタだなあと考えた。コンビニで普段言いにくくて頼めないものを頼んでみる、というのは割と手軽に練習できていいかもしれないと思った。Aさんは石川言友会、富山言友会、ういーすた北陸に参加している。言友会には言語聴覚士も参加しており、そこで訓練を受けている。具体的な練習方法としては、短めの文章を渡され、それを読み、それに対して言語聴覚士がアドバイスをする、というようなものだという。2018年8月に石川言友会に所属し、その後富山言友会を紹介してもらった。通い始めて約1年弱経つが、効果はあまり見られていないようだ。

Aさん自身も吃音が治るとは思っていない。

治れないと思う、かな。・・・一応まあ、言語聴覚士の方がそういうのされてるのは、喋るときの不安をなくそうというか、そんな感じで。えっと・・・まあ、どもってもいいから・・・喋ってみようみたいな感じ。

練習しても効果がみられないのに、それでも何故通うのか聞くと、

ま、続ければ・・・何とかなるんじゃないかなって感じには、ちょっと期待・・・してるというか。うん。

と語った。完全には治らないと分かっているながらも、希望は持ち続けている、複雑な気持ちが語られた。

そもそも「吃音」という単語を知ったのは最近になってからだという。大学4年生になり、周りの友達が就職活動を始めていたため、Aさん自身も就職活動について漠然と意識し始めた。面接のことを考えた時に、「この喋りにくい症状ってなんなんだろう。」と思い、ネットで喋りにくい症状というような単語で検索をかけ、その中に吃音があって、それが一番自分の症状に当てはまっているんじゃないかと思った。ういーすた北陸もその時に知ったという。それまでは言葉が詰まる症状として理解しており、説明をする時も同じように説明をしていた。

吃音の症状としては今と昔では、今の方が症状自体は重くなっているというが、気持ち的には今の方が楽だという。

重くはなったけど・・・一応まあ気持ち的には、昔に比べて喋りやすくなったかなと思います。今のほうが・・・楽かなあ。多分、周りが・・・大人というか、もうあんまりからかわれないから。まあ昔は吃音でたらからかわれたけど、今は全然、からかわれたりもせんから、まあ・・・今のほうが楽かも。

と語る。症状が軽いほうが気持ち的にも楽なのではないかと考えていたが、周りの環境、周囲の反応が大きく影響し、時には症状の重さよりも重要になってくるのだということが分かった。

第二節 「言友会に入ってカミングアウトが怖くなくなった」：Bさんの語り

Bさんは36歳男性の公務員であり、ういーすた北陸と富山言友会に所属している。

Bさんは幼稚園の頃からどもったりしている自覚があった。そのころは、まだ周りとは話し方が違うなど思っただけで、気にすることはなかった。家族から話し方について指摘されることはほとんどなかったが、小学生の頃ハビリセンターへ母親が連れて行ってくれた。そこまで症状が重たくはなかったため、そのまま大丈夫だと診断され、その後定期的に通うことはなかった。また、小学生・中学生の9年間、母親が毎年担任の先生が変わる度に、「この子は吃音があるから、もしそれが原因で周りからいじめられとったら注意してください」と伝えてくれていた。

そんなBさんが「吃音」という名前を知ったのは小学生になり、周りから話し方のことをいじられて気にするようになってからだった。家にあった百科事典を使い、「どもり」という項目を引いて、そこで「自分のこの話し方は、吃音っていうものなんだ」と知った。その百科事典に病気の後遺症でもなると書かれており、Bさんは1歳の時にはしかになったため、その後遺症でなると高校生くらいまで思っていたそう。

小学2,3年生の時、周りのからかいがだんだん激しくなってきた。「なんでそんな喋り方なんだよ」「～って言うてみてよ」等と言われたことがきっかけで、自分の話し方を気にし始めた。学校生活では、国語の本読みや、当てられて立って発表をしなくてはいけない時が苦痛だと語る。また、Bさんの小学校は、給食を教室ではなく、広い部屋で全校生徒（200人程度）で食べる。その際に、その月誕生日の生徒が自己紹介のようなものをした映像が流れる。それが嫌で、撮影当日逃げ回っていたら撮影順番が最後になり、余計目立ってしまった。どもって撮った映像が全校生徒の前で流れ、それがとても嫌だったという。

中学生時代は吃音の面でもそれ以外でも1番つらかったという。あまり思い出したくないのか、多くは語られなかった。思春期だということに加え、小学生時代に比べ周りもやんちゃになったため、からかひもひどくなり、吃音の症状もさらに重くなり、劣等感も増したのではないかと考えられる。中学3年生の2学期までは耐えていたが、ある日耐えられなくなり、殴り合いの喧嘩になってしまった。また、部活動は自然科学部に所属していた。クラスではいじられていたが、部活のメンバーは仲のいい人が多く、いじられることもほとんどなかった。活動内容は実験をし、論文にしたり、発表用のパネルにまとめたりして、コンクールに出すというものである。Bさんは研究が好きだったため、進学する高校を選ぶときも、コンクールで全国1位になった高校を選んだという。

高校進学でBさんの環境はガラッと変わった。進学校に進学すると、周りも比較的落ち着いた子が多く、からかわれることもほとんどなくなった。症状自体はまだあるものの、周りが何も言わずに聞いてくれるため、悩みも減ったという。部活動は中学に引き続き自然科学部に所属。部活の同級生が良い人ばかりで、このころから症状も表には出にくくなってきたという。言い換えたり、周りが何も言わず聞いてくれるのでリラックスして話せたりとか、良い環境の中で話していくうちに、自分なりの話しやすい話し方が身についてきた。

大学は京都の大学に進学し、土木関係を専攻していた。サークルは吹奏楽をやっており、そこで腹式呼吸やロングトーンを練習したため、より吃音を隠すことがうまくなった。このころはうまく隠せていたため、ほとんど吃音に関する悩みがなくなっていた。ただ完全に隠せたわけではなく、自己紹介等緊張して

しまう場面では、相変わらず症状がでてしまっていた。吹奏楽のステージでは、2年生の夏休みのステージで劇の主演に抜擢された。「B君は度胸があるでしょ。本番になるとパチッとスイッチが入るから大丈夫だ」と言われたが、Bさんは「ほんとに僕でいいんかよ」と思っていた。劇本番ではもったのは最初の1回だけで、あとは大丈夫だったというようなこともあった。

話す工夫としては、言い換えたり、息継ぎなしで長く喋ったり、身振りをつけたり、足を目立たない程度に動かして勢いをつけたりということをしている。このような工夫は、環境が良くなった高校・大学時代に一通り身につけたという。

大学1年生の夏休みの1日だけパン工場のバイトをした。会話のない仕事を希望し、その後は旅館の皿洗いのバイトに応募。応募の電話の時にどもってしまって、「どちらのお国の方ですか」と言われてしまった。それは1年生の春休みでやめ、皿洗いのバイトを経験し働くことに自信がついたことと、給料が良いということから、大学2年生の時は家庭教師のバイトをした。このころには隠すこともうまくなり、集中すれば30分程度はほとんどどもることなく話せており、普通に話すことができた。

就職活動では、1回目は緊張して、「1分間で自己紹介をしてください」と言われたが、大学名と名前がつかまって言えず、それで終わってしまった。言い換えができない名詞が苦手なため、自己紹介はいまだに苦手だと語る。大学の研究室で毎月、研究の進捗発表があったため、質疑応答に慣れていて、そのため、質問されたことにはスムーズに受け答えできたので、そこまで困ったことはなかった。

就職してから、再び吃音の悩みにぶつかったとBさんは語る。営業や小売業より話す機会が少ないだろうと思い、富山県内のメーカーに就職をした。しかし、名刺交換や電話対応でとても苦労したという。

「お電話ありがとうございます」って言わなきゃいけないのに、まずそれが言えないでしょ。で、こっちからかけるときも会社名が言えなかったりして。いまだにそこでつかえちゃいますけど。電話をかけなくてはいけないことがわかっている日なんかは、それだけでプレッシャーだったし。1年くらいやったら慣れたけど、でも新入社員の時は辛くて辛くて、周りの人間がスラスラやってるのが出来ないっていうのが、ね。

また仕事では、社長の前で仕事内容を報告するというのが2カ月に1回くらいあったり、仕事にあっただ成果を全社員の前で報告したりするということがあったが、Bさんが任せられることが多かった。なぜ自分なのか上司に聞くと、「B君の発表は分かりやすいから」と言われ、それが自信につながったという。

吃音についてはカミングアウトをすることはなかったが、1回だけ上司から「B君はもともとそういう話し方なんか」と聞かれて、「そうなんですよ。そういうのがあるんですよ」と言ったら、「仕事で話す前に、自分はこういう話し方なんでって言ったほうが良いんじゃないか」と言われた。そうしないと、つかえたりしてるとおどおどしたり、隠し事してたり、自信がないように見えてしまう可能性があるから、最初に言ってみたらどうだということだったが、その時は心の中で「絶対するもんか」って思っていた。

隠すのに必死だったし、絶対言いたくないって思ってたね。うまいこと隠せてるのって思ってたんかもしれないですね。まあ電話してるところみたら気づきますけど、仕事で対面で会うだけだったら

ほぼ気づかれないくらいだったと思うんで。

残業が多かったため5年半で退職し、その後29歳から33歳まで日本一周の旅をした。その後友人と喫茶店を開こうという話になり、Bさんはドライバーのバイトをしながら準備を進めていた。バイトを探す際、症状や悩みは軽減しているのに、やはり「話さない」という条件で職を選んでしまっていると気づく。ニート生活が長かったため、働くことに自信がなくなっていたのかもしれない。

その後、喫茶店を開く計画がなくなり、弟から公務員を進められ、勉強し始めた。勉強を始めたのが2017年4月で、試験が6月の終わり。その間日中は家で試験勉強、夕方は塾にバイトに行っていた。塾のバイトで慣れたのと、社会人経験があったため、面接は上手く話せ、8月に無事合格。その後、9月17日に富山言友会ができるという新聞記事を見て参加を決意。これが初めての吃音関係のイベントの参加だった。試験が終わり、県庁で働くことが決まったことで、吃音もあって不安があったから行こうと思った。

会場に当事者15, 6人くらいいて。そんなにいるんだってそこでまずびっくりして、で、みんなの語ること自分も経験したことにとっくりで。例えば子供の頃いじめられてとか、国語の本読みが苦手とか、就職してからもうまく話せなくてとか、もう本当に自分の経験そのまんまというか。そういう人がいるんだってびっくりしました。

そこからもっと話を聞きたい、自分の話もしたいと思い、10月にはういーすた北陸にも参加した。

言友会で話しているうちに、人前でどもることが怖くなくなった。仕事の間では隠すテクニックを使うが、同僚とかの前では、どもりながら話すほうが楽だからそうしている。

今までは症状を隠して話していたため悩みも表面上にはでなかったが、自分の中で消化しきれないものがあった。それが言友会に入って、どもることが苦痛じゃなくなった。(Bさんは症状が軽いということもあるが)どもってもいいやと思っているからリラックスして話せて、精神的にすごく楽になった。

カミングアウトも富山言友会に入るまではしたことがなかった。高校までは症状が重かったためカミングアウトするまでもなくわかるし、高校以降も多少は症状はあったが、周りも何も言わずに聞いてくれるため、カミングアウトの必要性を感じなかった。

富山言友会に入会後、アルバイト先で塾長やほかの先生たちと話している時に初めてカミングアウトをした。「実は最近富山言友会っていうのに行って、昔から吃音で悩んでたんで、それで富山言友会っていうのにこの間行ってきたんですよ」という話をしたら、塾長が「え、全然気にならないけど」と言ってくれた。そこで初めて「周りってそんなに気にしてないんだ」と気がついたという。

言友会に入るまでは、吃音のことは考えたくない・避けたい・どむるのが怖いという感じで隠していたが、言友会に入ってカミングアウトが怖くなくなった。そこにいる人たちはみんな当事者だから、まず吃音のことを話題にできるようになった。それもあって塾でカミングアウトできたという。

現在の職場でも、飲み会のような砕けた場で富山言友会の話をした。バレたらどうしようっていう不安がなくなるから、言ってしまったほうが楽だと考えたからだそう。今は吃音のことより、仕事内容で悩むことばかりだと語る。

現在の職場で、全ての課（15 個の課が存在する）に自己紹介しに行かねばならず、15 回もった際、その日は落ち込んだが、翌日には忘れていた。

もし言友会に入らずにあの状況になっていたら、めちゃめちゃに落ち込んでいたと思う。だからあのタイミングで言友会に入ってよかった。

と語った。

第三節 「自分の強みをどうつけるか」：Cさんの語り

Cさんは53歳、男性会社員であり、中部地方の言友会に所属している。

Cさんが吃音を発症したのは2歳半くらいだと母親から聞いた。自覚をしたのは、4歳から5歳くらいの時。周りの子と話すときに、なんか話し方が違うなと思ったという。この時には難発の症状になっており、きっかけは父親の死だったのではないかと考えられる。家庭内で吃音のことを話すことはほとんどなく、治しなさいというように言われることもなかった。

Cさんが通っていた小学校には校内にことばの教室があり、週に1回通っていた。ことばの教室とは、主に言語障害のある子どもたちの支援をする教室のことである。校内にことばの教室があることで吃音者がいてもおかしくない、それが当たり前だという認識に自然となっていく。そのためか、吃音でからかわれることもほとんどなかった。ことばの教室では、DAF⁽³⁾を使用したり、本読みやかるたを使用して練習をしたりしたが、Cさんは他の同級生と遊んでばかりいたため、先生も途中からは諦めたようだった。ことばの教室には、教室の後ろにおもちゃが置いてあり、みんなの遊び場になっていたという。先生は止めたりするわけではなく、放置していた。ことばの教室内でもいろんな子と話して時間を過ごすことで、先生たちも生徒の友人関係や、どういうところで症状が出やすいのかを把握することができるため、今になって思うとそれが返って良かったのかもしれない、とCさんは語る。

小学校から中学校までの先生たちは、一貫して他の子と同じようにCさんを話させた。英語や国語の授業も、汗をかいて教科書がしわしわになってでも読ませ続けた。発表するときは恐怖心はあったし、多少周りに迷惑はかけているなというように思いつつも、よく受け入れてくれたな、とCさんは語る。小学校、中学校で計7人の先生に担任をもってもらったが、ずっと対応が同じだったということは教育者の中で引き継ぎがきちんとされていたということ。そういう意味で、小中はとても恵まれた環境だった。

高校では進学校に進学したため、吃音のことでなんだかんだと言われることはなかった。中高ではバスケットボール部に所属しており、審判等も周りと同じようにこなしていた。審判等、前もって予知ができない時は予期不安がほとんど生じず、ブロックがかかりにくいいため、症状はほぼでなかったという。ある時、英語の授業で発表中に詰まった時、先生がとっさに「じゃあそこまで」と言ったことがあった。Cさんは症状がでること自体は辛いという思いがあったが、「吃音だから差別する・される」ということに抵抗感をもっている。そのため、「先生、止めて欲しい。みんなと同じように喋らせてほしい」と伝えたという。それ以降、どの先生も同じ対応をしてくれた。Cさんは勉学も運動もそこそこできたため、学習面等では劣等感をもつことはなかった。

大学は経済学部に進学。経済の英語の授業では、なぜかあまりしてもらなかった。美術部に所属しており、その活動の一環で地域の大学が集まって交流を深める芸術交歓祭が行なわれた。そこでCさんの大学の美術部は他大学の美術部とのパイプ役をしていたため、話をする機会や電話をする機会が多くあったという。また、遠方の大学と交歓ゼミを行うこともあり、大学生活の中で話をする機会に恵まれていたため、この段階でだいぶ話すことや電話には慣れ始めていたという。

就職活動ではいくつか内定ももらったが、その中で、ある企業だけ面接中に「あなた吃音ですね」と面接官に言われた。その時「仕事はちゃんとできるのか」というようなことを質問されたという。Cさん自身、そのような質問は当然でてくると思っており、その時「吃音だったら仕事できないんですか。私は地

域を元気にするために御社を選んだんですけれども、吃音とその仕事は関係あるんですか」と返答した。面接官は皆目が点になっていた、とCさんは語る。このような話が面接中にあったのにもかかわらず、内定を出してくれた。Cさんは、吃音のことを理解してくれているところのほうが働きやすいだろうと思い、他の内定を辞退し、その企業に入社を決めた。

最初は電話対応が怖かったが、大学での経験もあったため比較的早く慣れた。大学生の時、アルバイトで居酒屋や家庭教師等やっていたので、上手く話せないながらも、セールスも積極的に行っていた。入社して2年目の冬のある日、Cさんはあることを提案した。その当時誰もやらなかったことだったが、それが上司に評価され、本社へ異動した。いざ本社へ行くと、吃音だからかあまり仕事をさせてもらえなかったという。そこで1年ほど経ったときに、ある仕事の手伝いをした。そこで困難を極めつつも結果大成功に終わり、四半世紀経つ今でもその影響は残っている。その結果評判が評判を呼び、次から次へと仕事の話が舞い込んできた。そこでも様々な成果を上げ、入社当時から希望していた部署へと異動することができた。

他部に異動したある日、現地調査する機会があった。そこでは取引先の方と直接話し、いかに損失を少なくして、事業を続けていくにはどうしたらいいのかを整然と伝えなくてはならない。何百人という従業員の生活がかかっている案件になってくるため、自分が吃音だということを考えている暇は当然ない。そしてその結果を本部に持ち帰って上司に報告をしなくてはならない。そういうことを一遍にやり遂げられたという経験をする中で自信がついた、とCさんは言う。

私は正直、吃音があるから同期と同じ土俵では戦えないと思った。話すということを否定するわけじゃないんだけど、決して得意なわけじゃないからさ。話すの得意な人っているんだって。そういうやつらにはとても勝てないんで、同じ土俵で戦えないとすれば、自分の強みをどうつけるか、どうやって会社の中で生きていくのかっていうのを常に考えてる。経営者が外部環境に対して、どのように会社が対峙していくのかっていうような姿っていうのは調べないといけないし、聞かないといけない。そういうのを頭に入れたうえで情報を見ないと、誤った見方をしてしまう。微妙な匙加減が必要なんです。そういうところに特化していこうと思って、僕は早くからしました。

このように、Cさんは自分の強みを見つけ、そこで勝負していくという姿勢で仕事をしている。また、吃音に関しても決してマイナスな面だけではないとCさんは考えている。

多少どもってもいいから、自分の真実をしっかりと伝える。スラスラスラっと言われるよりも、こちらの思っているのが伝わる時もあると思う。どれだけ心をもって接しているのかっていうところでは、セールスをしたりする時には、吃音は決してマイナスではないと思う。もちろんある程度話ができるっていうのは前提条件としてあると思うけどね。まあ確かにさ、大きな弱みではあると思うよ。だけど自分の心を素直に伝えられるんであったら、相手に対してかなり誠実な対応ができるのだ。相手の苦しさも絶対知らないといけないし。そういう意味で自分の苦しきっていうのも、辛いけどさ、吃音っていうのは、でもそれもまたひとつかなと。まあ多少弱い部分をもっててもいいんじゃないかなって。

このように C さんは吃音を冷静に見つめ、弱みだと認めつつも、マイナスばかりではないと受け入れている。

そんな C さんが言友会に入会したのは 40 代前半。管理職になるタイミングで、もう少し上手く喋れるようになりたいと思い、入会した。C さんは吃音ですごくつらい思いをした、というようなことはないという。他の人が「からかわれてすごく辛かった。」「死のうかと思った。」というような話を語る中、C さんはそういう話や思いを共有・共感することができない。そのことがセルフヘルプ・グループにいる中で辛い部分だ、と語った。

カミングアウトは自らすることはなく、指摘された場合「どもって何が悪い」というような返答をしている。ただ、これは「仕事では吃音があっても収益が得られれば問題はない」という意味であり、完全に「吃音は悪くない」というように考えられてはいないという。話す工夫としては、難発で詰まってしまった時、強張った筋肉を意図的に緩めたり、話し始めの音を柔らかく発音したり、ゆっくり話すことを意識したりしている。言友会では早口言葉の練習をすることもあったが、自分には合っていないと思い、その練習はしなかったという。いろんな方法があるが、自分に合った方法を取捨選択していくことが大切だと C さんは語った。

第四節 「吃音で恥ずかしいと思いながらも、どうやって生きていくか」：Dさんの語り

Dさんは40歳男性、市役所で勤務をしており、石川言友会に所属している。

Dさんが吃音を発症したのは保育園のころ。そのことは20代の頃、片づけをしていて偶然見つけた幼稚園の連絡帳に「どもっている」ということが書いてあったのを見て知った。症状は連発で、中学生以降くらいから難発も発症したという。吃音のことを気にし始めたのは小学校の中学年頃。自分では普通に話しているつもりなのに、友達から「どもっとる」と指摘されたことがきっかけだった。そのころくらいから、親に連れられ、ことばの教室にも通っていたが、治すために行っていたという意識はなかったため、あまり行っていた意味はなかったように思う。ただ親は心配してくれていたんだな、と感じているようだ。小学校高学年になると更にからかいが多くなった。教室の本棚に自分が描いた漫画を置いていた子がいて、その漫画にDさんの話し方をからかうような内容が描かれていたという。これらのことがきっかけで、吃音をコンプレックスに思うようになった。このころ、母親に「なんで自分はこんな話し方なんや、こうなったのは母さんのせいや」と責めたこともあったと語る。

中学生になり思春期になったこともあり、更に吃音のことを気にするようになった。もともとはお喋り好きだったDさんだが、吃音をコンプレックスに思うようになってから、消極的になり、友人とも積極的には話さなくなってしまった。部活はバドミントン部に所属。審判等では特に困ることはなかったという。

高校では、学園祭で劇の発表があった。最初は頑張ってセリフのある役に挑戦しようと思ったが、途中から練習をしていてセリフが言えず、裏方にまわったことがとても悔しかったと語った。部活はサッカーをしていたが、3年生の時に後輩のほうが上手く、そのことを周りがどう思っているのかが怖くて、3年生の早い段階で辞めてしまった。Dさんは授業中の発表等ではあまり症状がでなかったため、それほど苦い思いをしたことはない。逆に、友人と話したりする時の方が症状がでてしまうため、話したくても話すことを諦めてしまう、ということがあったそうだ。また、

小さいころは話すことが好きやったってことを考えると、吃音によって話すことも避ける、みたいな感じになってたっていう気はする。吃音が治らないと将来どうしたらいいんやろって悩んでた。吃音さえ治ればっていうことはずっと思ってることですね。

横浜の大学に進学。大学2年生の頃、大学の相談室に吃音のことを相談しにいったこともあった。相談内容は、「吃音があって友達と話せない。就職等将来が不安だ」というような内容だったという。Dさんが吃音という名称を知ったのはおそらく大学生の時。インターネットで調べ、その時に横浜言友会があることを知り、勇気を出して参加をした。ただ、その時は知らないおじさんばかりで疲れてしまい、行くのが嫌になって、1回だけの参加になってしまったと語った。

就職活動では話すことをできるだけ避けたいという思いから、公務員を志望した。民間は何回も面接を受けなければならないが、公務員であれば筆記試験の割合が大きいので、公務員の道を選んだという。無事合格し仕事が始まると、やはり電話対応が大変だったという。

自分の会社名がなかなか言えんのはしんどかった。でも新人やし電話でんといかんっていうので、汗か

きながら、お前の言っことはわからんっていうことも言われたりしながらも、毎日とってると慣れてきて、まあなんとかこなせるようになった。でも、後輩がつくと、後輩に電話とらせるから、そうするとまた自分で電話とるのが怖くなったりもして。とれんくなったりとか。でも違う課に行ったらまた新人だから電話とらされたりもして。そういうことを繰り返していくうちに、少しずつ電話も慣れていったっていうのはある。

数をこなしていくうちに慣れたというが、やはりある程度期間が開くと電話をとることに恐怖心が生まれてきてしまう。今でも電話は嫌いだが昔よりは苦ではなく、意識的に電話をとるようにしている。

大人になって大きかったのは石川言友会に参加をしたことだという。仕事をしていく中で、もっとうまく話せるようになりたいと思い、参加を決意した。今まで吃音の話を深くできる人がいなかったため、吃音ですごく苦しかった思いを共感してもらえる、というのは大きかったという。

自分しかいないし、こういう話をする人もいないし、すごい孤独で。でも自分の中で一番核心というか、吃音の話は普段友達としないけれども、自分の中で一番話をしたい・共有したいっていうのは吃音。けれども、そういう話をせず、テレビの話とかくだらん話をしとって。いや自分が話をしたいのはそこじゃないと。っていう思いがあったなかで、言友会に行くと、言友会にはいったら吃音の話がメインなんで。まあそこで吃音の話ができるっていうのは、すごい自分にとっては救われたというか。孤独ではなくなったなと思います。

また、Dさんは石川言友会で出会ったEさんに憧れていたという。EさんはDさんとは対極的であり、前向きな性格で、どもってもいいという考えを持っている。DさんはEさんのようにになりたいという思いで、どもっても気にしないようにしてきた。しかし、今ではEさんと自分は違う、という風に考えている。

自分もこうなりたいって思うところがあって、自分もどもっても気にせず話すようにしよう、と思いながら過ごしてきた、話す場面から逃げないようにしようとかね。そのころから繰り返し替えてきた、頑張って頑張ってきた、と。でも話すときはやっぱりどもりたくないし、恥ずかしいし、なんかどもるのが人に迷惑かけてるんじゃないかっていう思いがあって。例えばみんなが楽しく話しているときにどもって話したら、話の流れを止めちゃうんじゃないとか。どもって言ったら面白いことが面白くなくなったりしてしまったりして(笑)冗談を言うのが難しい。話す内容よりも、話し方に周りが注目してしまうんやよね。だから自分は気にしてしまうタイプなんやなと。Eさんとは自分は違うタイプなんやなということを思った。最近になって思う様になったんやけど、別にEさんにならんくていいんだ、と。吃音で恥ずかしい思いながらも、どうやって生きていっていったのかをここ数年、考え始めました。今まではどもって何が悪いんやと、どもっても気にせず話すことが大事で、それに向かって努力しようっていう感じやってんけど、今は目指す方向が変わってきたなと思います。これまでは、人にどう思われるんやろとか、迷惑かけてるんじゃないかとか思ってたけど、意外と周りの人もいい加減やし、話したい事話しとるし、お互い様なんかなって。どっちかっていうと、自分は何もから話しませんっていう人よりも、どもっても話したい

ことを話してコミュニケーションをとる人のほうが相手にとっても自分にとってもいいんじゃないかみたいな。どもることもマイナスはあるけれども、それより話すほうがプラスになるんじゃないかって思えてきた。恥ずかしいっていう思いも持ち続けながら、話したいことは話したらいいし、無理してこうしなきゃいけないとか、前向きにならなきゃいけない、とかじゃなくて、別に恥ずかしいと思って話さん時もあるっていいし・・・こうじゃなきゃいけないっていう思いとか、自分を縛るようなことはやめようって、思う。柔軟に考えられるようになりました。前向きになれば一番いいし、理想やなって思うけど、まああくまで理想は理想やし、他人とは違うから。

話すときの工夫として、言い換えやゆっくり話すことをほぼ無意識でやっているという。また、精神面では無理して話そうというように思わないようにしているという。このことから、Dさんの考えに大きな変化があったと分かる。

Dさんは学生時代、吃音について話すことができなかった。悩んでいるが、吃音の話をするのがタブーのようなものだったという。しかし、当時付き合っていた女性には、あえてカミングアウトをしていた。「吃音をもっているこんな私でも付き合ってくれますか」というように、吃音を持っている自分を認めてほしかったのだと語った。今はプライベートであえてカミングアウトをする必要は感じていない。

どんだけ周りが認めてくれても、自分が吃音がある自分はダメやって思っと思ったら、自分はある程度自信もてんなっているのがあって。結局自分が自分をこれでいいって思わなかったら、だめなんかなって。だって自分が自分をこれでいいって思えば、別に周りがどう評価されようが、そんなんでもよくなってしまおうような気がする。だから、自分の自信のなさを周りで埋めようとしても自信はつかんよねって思う。だからカミングアウトとかはあえてしようとは思わん。してもいいけど。

一方で、仕事では吃音について説明したほうがいい場面があると考えている。仕事では、ある程度相手が分かるように話すことが求められる場面がある。例えば、時間制限内に決められたことを話さなくてはいけない時、自分ではどうしてもできないと思ったときには他の人にお願いしたり、時間を延ばしてもらったりしている。そのほうが会社にとっても自分にとってもいいのではないかとDさんは考えている。周囲が症状に気づいていたとしても、吃音のすべてを理解しているわけではない。そのため、苦手な場面や得意な場面は何なのかということは自分から説明していったほうが良いと考えている。

第五節 「どんなことが起きてても悲観しないこともね」：Eさんの語り

Eさんは42歳男性、食品関係の会社で営業をしており、石川言友会に所属している。

Eさんは4歳の頃に連発で発症した。母親も吃音者で、母親の親戚にも吃音者が2人いたため、家庭内では変だと感じたことはなかったが、近所の子と遊んでいる時に「なんでぼぼぼ僕は、って言うの？」と言われた。そのことがきっかけで、自分の話し方は変なのだと思ったそうだ。

小学1年生の時、国語の本読みで1番に当てられたEさん。その時に「ああある日のことでした」とどもってしまった。その時、クラスのみんが笑い、それだけでなく、先生まで笑っていたという。その時はなんで先生まで笑うの、と悔しくて泣いてしまった。この光景は今でも鮮明に記憶に残っているという。小学2年生の頃、親にことばの教室に連れていかれたことがあった。2, 3回連れていかれたが、先生からは「特にどもってないし来なくていいわ」と言われたという。また、クラス替えの時は自己紹介があるため緊張して、3月の終わり頃から毎日自分の名前を言う練習をしていた。小学校5年生の時、学級委員に指名をされたことがあったが、「どもりがあるのでできません」と、クラスみんなの前で言ったことがあった。この時の周囲の反応はあまり覚えていないが、否定的な意見はなく、了承されたという。中学生になると、答えが分かっている、どもりそうなきは「わかりません」と言ってしまう時もあったという。

小学校は遊びに夢中、中学校では吃音を少し意識はしていたものの、勉強と部活でいっぱいだったEさん。そんなEさんは吃音を気にし始めたのは高校生になってからだった。思春期もあり、恥ずかしいところは見られたくないという感情が強く、1番悩んだ時期だった。高校2年生の時の漢文の授業で、文章を割り当てられ、意味を調べて発表をするという授業があった。Eさんの発表は6か月後だったが、それまでずっと吃音のことで悩んだという。周りが普通にできることができない、自分は何だめな人間なんだろう、と思ったと述べた。この吃音で悩んでいる間に、当時所属していたバスケットボール部をやめてしまった。表向きでは受験勉強に専念したいからという理由にしていたが、実際は吃音のことで後輩に何か言われるんじゃないか、陰口をたたかれるのではないか、という不安がよぎったため辞めたという。その後、3年生の時に数学の授業で同じような授業が行われた。もう2年生の時と同じことは繰り返したくないと思い、数学の先生に相談をしにいった。その時は上手く伝えられるか不安があったため、紙に書いて持って行ったが、「別に気にしなくてもいいよ」というだけで特に配慮等はなく、自分で行くことになった。

Eさんは浪人している時に吃音をなんとかしたいと思い、新聞を読む練習をしていたことがあった。この時は、少しでも詰まったらいけないという風に思っていた。そして大学は、今までの人間関係を一新したいと思い、京都の大学に進学。親友ができ、もっと仲良くなりたい、素の自分を知ってほしいという思いから、親友には吃音のことを打ち明けた。親友は普通に受け入れてくれ、鮮明には覚えていないが配慮もしてくれたと思う、とEさんは語った。その親友も実は色盲で、信号の色がたまに分からないことがあるのだという。それを聞いて、皆何かしらの弱みを持っているのだと思い、更に親しくなった。カミングアウトすることに抵抗はないのか聞くと以下のように語った。

言うこと自体には抵抗はなかったかな、隠したいっていうよりは言っただけで楽になりたいっていう思いのほう

が強かったから。隠してたら窮屈でしょ。

大学生になり、アルバイトを始めた。最初は接客が怖かったため、食器洗いや単発で展示会の片づけなど、あまり話すことのない仕事を選んでいった。様々なアルバイトをしていくうちに働くことの自信がついたのか、接客業をしたいと思い、大学3年生後半～4年生の初めくらいまでコンビニのアルバイトをした。「ありがとうございました」と言うのもどもと分かっていたため、最初の「あ」を省略して「りがとうございました」という風に誤魔化していた。それでも、接客業ができたということで、さらに自信がついたという。

また、大学1年生の時、学生相談室に吃音のことを相談しにいった。最初は相談室の扉を開けることを躊躇したが、このままでは高校生の時と同じになってしまう、何か変えないと、と思い、勇気を出して扉を開けた。そこでEさんは京都言友会という存在に出会った。この出会いがEさんの人生を大きく変えた。こんなにも吃音をもっている人がいるんだと衝撃を受けた。そして、吃音のイベントで当事者が一生懸命司会をやっている姿に心を打たれた。その中で、吃音は個性であり、悪いことではないという風に考えられるようになったという。しかし、20代の頃は頭ではそう理解していても、また吃音への恐怖心が戻ってくることも多かった。一筋縄ではいかないが、人生経験を積んでいくことでその頻度は減り、今では症状が残っているものの悩んではないという。Eさんには言友会での活動を通じて大切にしていることが2つある。1つ目は、人それぞれの年齢に応じて「その当時には、できない・怖いと思ったことに挑戦する」ということ。例えば、人と話す自信を付けるために、コンビニでコーヒーの場所が分かっているのに、敢えて、お店の店員さんに「コーヒーはどこですか」と聞いたりする。2つ目は多くのことに挑戦し、失敗しても考え方を改めて悲観しないこと。「この方法でやると失敗するということが分かって良かった」と考えることで、失敗が成功になる、とEさんは教えてくれた。言友会のいいところは、体験発表の場を与えてくれることだという。大勢の前で話す機会はそうそうないし、話すことに慣れるため、自信をつけるためにも良い場だとEさんは思っている。

体験発表が終わったことで、かなり自信がついたんだと思うんだわ。人間って自信がつくと吃音が軽くなる、っていう傾向がある。し、あの、何かひとつの分野でいいし、これは誰にも負けないっていうのをつくると、それが自信になって、吃音が軽くなる傾向がある。絶対とは言えないけど。

Eさんは言友会との出会いが、自身の人生の中で一番重要視している。

僕の人生でやはり、言友会との出会いが一番大きい。富山大学受験して落ちました。でももし富山大学に行っていたら、その時富山言友会ってなかったんで、今の状態になってなかったと思う。落ちて、浪人して、環境を一変したいと思って京都に行き、京都言友会に出会った。そこで人生が変わり、今がある。そう考えたら、人生って何がどうなるかわかんない。受験に落ちて、もう駄目だと思っても、それがかえって良かった、っていうことがあるんで・・・まあどんなことが起きても悲観しないことかもね。僕は言友会との出会いが全て。

就職活動の時には京都言友会での活動をしてきたこともあり、自分の吃音をある程度受け入れられるようになっていた。Eさんは、吃音があっても関係なく受け入れてくれる会社が、自分にとっていい会社だと思い、面接でも吃音のことをオープンにし、京都言友会での活動内容等をアピールしていたという。Eさんは少しでも吃音を克服したい、喋らなくてはいけない環境に身を置き、話すことから逃げないようにしたい、という思いから営業職を希望していた。今もその当時内定をもらった会社に勤めており、働き始めて19年目になるという。

というのは、就職活動の大変さを身に染みて感じたので、またあのしんどいのをしなきゃいけないのは嫌やなって思って(笑)

Eさんは入社し、出荷作業を経験し、営業し、総務をし、現在はまた営業をやっている。最初は緊張して名刺交換でもってしまっていたが、最近は慣れてきて、ほとんどどもることはなくなった。社会人になると、たくさんの人と名刺交換をする機会がある。そうすると名前と顔が一致なくなってしまうことがあるが、どもることによって印象づけることができ、すぐ覚えてもらえる、と吃音がメリットになる場面があることをEさんは語った。営業をやっていて、お客さんに「ちゃんと喋れや」と言われたことがあったという。その時はとてもショックだったが、「社会人にもなってそんなことを言う人は大した人じゃない」と視点を変えて気にしないようにしていた。10年程経ち、同じ人と喋って話し方をマネされたりすることもあるが、今では「まだそんなこと言ってるんだ」という風に思っている。マイク放送では全社員が自分の声を聞いていると思うと怖く、最初の頃は代わってもらったこともあった。それも回数を重ねてどもらなくなると、パートさんに「上手くなったね」と言ってもらい、自信に繋がったという出来事もあったという。

Eさんは、話す場面から逃げたくなくても逃げないほうが良い、というように考えている。

話す場面から逃げたくなるけど、逃げないほうが良いと思うわ。自分を上手に見繕って逃げたとしても、それは成功とは言えないと思う。それやったら、面と向かってちゃんと話して、豪快にどもったほうが成功やと、僕は思うわ。し、僕はそうやってやってきたし、それが全員に当てはまるわけじゃないと思うけど、そうやって少しずつ自信をつけていって、今があると思う。

その一方で、このような語りも見られた。

でも、どうしても逃げたい時は逃げてもいいと思う。その時に駆け込める、逃げれる場所があったらいいと思う。僕はそれが言友会やったから、(筆者が)名古屋とかに行っても言友会と接点は持つといたほうが良いと思うわ。

第六章 分析・考察

この章では、前章の調査の内容に基づいて、分析・考察を行う。

第一節 どのような物語を語ったか

インタビューたちはどのような物語を語ったのかをみていく。

第一項 「症状改善」の物語

Aさんは「気持ち的には、昔に比べて喋りやすくなったかなと思います。今のほうが・・・楽かなあ。多分、周りが・・・大人というか、もうあんまりからかわれないから」という語りから、基本症状の改善とは異なるが、精神的な悩みは軽減されている。吃音は例え症状が軽くなったとしても、それに対する悩みが大きければ改善されているとは言い難い。反対に、症状が重くても本人が気にしていなければ、そもそも改善という概念も生まれまいだろう。そのため、この語りも「症状改善」の物語の一部であると言えるのではないだろうか。

Bさんは高校で良い方向に環境が変わり、吃音に関する悩みが軽減していった。その環境に身を置くなかで、自分なりに話しやすい話し方を身に付け、症状を隠すことが上達していったという。これは、第二章第二節で挙げた、「症状」の②回避の上達である。日本吃音臨床研究会（2019）では回避が強まると吃音が悪化すると書かれている。しかし、Bさんの場合は回避をすることで吃音に関する悩みも軽減したということもあり、必ずしも回避が吃音を悪化させるとは言えないのではないだろうか。

Cさんは、仕事でももう少しうまく話せるようになりたいという思いから、言友会への参加を決めた。しかし、症状が改善したとまでは語っていない。

Dさんは「症状改善」の物語を語らなかった。

Eさんは、人生経験を積んでいくことで症状が出ることの恐怖心は減り、今では症状は残っているものの悩んではいないという。また、最初のうちは、仕事での名刺交換でどもってしまっていたが、最近は慣れてきて、ほとんどどもることはなくなったと語る。

第二項 「開示」の物語

Aさんは高校の時に所属していたバドミントン部で、症状がでるままに審判をしていた。そのため、周りはAさんの吃音について知っていると思われる状況であった。また、高校の委員会やアルバイトではなるべく話さないものを選んでいった。ここは伊藤（2005）がいう「開示」の物語とは異なっている部分で、主人公（Aさん）は変化していない。

Bさんは、高校、大学で吃音を隠すことが上達した。仕事で上司から吃音を打ち明けることを勧められた際も強く拒否したことから、吃音が露見することが怖かったと考えられる。その後、富山言友会に入会后、カミングアウトが怖くなくなったと語る。

Cさんは自らカミングアウトすることはない。同様にDさんも、現在はあえてしようとは思わないという。

Eさんは、大学生の時に親友に開示をし、それ以前よりも仲が深まったと語った。

第三項「後景化」の物語

Bさんは、仕事で「B君の発表は分かりやすいから」と認めてもらえたことで、自信がついたと語る。また、富山言友会に入会後、アルバイト先で塾長やほかの先生たちに開示をした。その時、塾長が「え、全然気にならないけど」と言ってくれたことで、初めて「周りってそんなに気にしてないんだ」ということに気がついたという。

Cさんは、仕事で大きな業務を成し遂げ、入社当時から希望していた部署へと異動することができた。責任のある仕事を任せられ、無事にやり遂げられたことが自信につながったと語った。また、自分の強みをどうつけるかを常に考えているという語りもみられた。

Dさんは、「後景化」の物語を語らなかった。

Eさんは、大学3年生後半～4年生の初めくらいまでコンビニのアルバイトをした。「ありがとうございました」と言うのもどもと分かっていたため、最初の「あ」を省略して「りがとうございました」という風に誤魔化していた。それでも、接客業ができたということで、さらに自信がついたという。また、仕事でのマイク放送では、初めのうちは症状が露見することが怖く、代わってもらったこともあった。しかし、それも回数を重ねてどもらなくなると、パートさんに「上手くなったね」と言ってもらい、自信に繋がったという出来事もあったと語る。

第四項「出会い」の物語

Aさんは、「出会い」の物語を語らなかった。

Bさんは、富山言友会で話しているうちに、人前でどもることが怖くなくなった。そう思えるようになったため、リラックスして話すことができ、精神的にかなり楽になったという。

言友会に入るまでは、吃音のことは考えたくない・避けたい・どもるのが怖いという感じで隠していたが、富山言友会に入って、まず吃音のことを話題にできるようになったと語る。言友会に入ったことがBさんにとって大きな変化のきっかけとなった。

Cさんは、言友会に入会したことで変化をしたという語りは見られなかった。

Dさんは石川言友会に入り、吃音の話ができるようになったことで孤独から救われたと語る。

Eさんは京都言友会に出会い、人生が大きく変わったという。まずこんなにも吃音をもっている人がいるのか、と衝撃を受けた。そして、吃音のイベントで当事者が一生懸命司会をやっている姿に心を打たれた。その後、活動をしていく中で、吃音は個性であり、悪いことではないという風に考えられるようになったという。

第五項 まとめ

以上のことから、人によってどの物語を語るのかが異なるだけでなく、一人の語りの中に複数の物語が含まれている場合があることが明らかになった。「開示」の物語については、筆者の関心上、焦点化されやすかった可能性があるが、伊藤（2005）のいう「開示」の物語とは違う点も見られた。例えば、Aさんは症状を出るがままにしているが、それを全く気にしなくなったわけでもなく、高校の委員会やアルバイト

を選ぶ際には、なるべく話さなくてよいものを選択していた。伊藤（2005）の事例とは異なり、Aさんは何か変化をしたわけではない。

また、インタビュー어의語りを聞くと、セルフヘルプグループに出会い、語り手が変化をし、開示をすることができるようになったという語りがいくつかみられた。ここから、「出会い」の物語と「開示」の物語は関連がありそうだとはいえるだろう。もちろん、そのように語らない人もいるため、一概には言い切れない。

このような多様性のある物語が存在するのも、それが受容されるセルフヘルプグループに所属しているからであろう。

第二節 新たな開示の語り方

この節では、開示に焦点を当てる。本論文の語り手たちの中には、伊藤（2005）が挙げた「開示」の物語の事例とは異なる開示の語り方をしている人がいた。

伊藤（2005）の事例は、主人公は吃音で精神的に苦しみ、意を決して吃音のことを友人に打ち明け、変わらぬ友情を約束する。そのことがきっかけで、主人公は「やりたいことはすべてやる」という人に変化したという物語だった。Eさんの大学生の時に親友に吃音のことを打ち明け、そこから更に仲良くなった、という語りはこの伊藤（2005）の事例に近いと思われる。

一方、伊藤（2005）の「開示」の物語とは異なる開示の語り方をする人もいた。そこでは、開示によって主人公が変化することはないように思われる。このことをどのように考えることができるだろうか。

まず、Cさんは自らカミングアウトをするということはしていない。吃音を悲観的に語ることもほとんどなく、大きなコンプレックスに受けとっているようには考えにくい。ただ、就職活動で最終的には「吃音を理解してくれているか・そうでないか」を基準に入社する企業を決定したことから、「吃音だと相手が認知していることの安心感」というものはCさんの中にも存在しているが、自ら開示して獲得するまでのものではない、というように考えられるのではないだろうか。そのため、ここではCさんの物語は「開示」とは無関係であるとし、分析の対象から外す。

Aさんは吃音があることでできそうにないことに直面した時、開示をして配慮をしてもらおうという語りが多い。しかし、そのような必要のない場面では自ら開示をすることはしない。発表の時も難発がでも特に何も言われることもないため、以下のように語る。

*みんなも理解してくれてるんじゃないかな。だから特に言う必要もないかなーとかって思ったりはして
ます。*

Aさんの場合は、普段症状がでることは特に気にしておらず、自分では難しいだろうと判断した時に開示・説明をして、周囲に配慮を求めるというスタンスであることがわかる。

またDさんの場合、学生時代は吃音のことを話題にすることそのものがタブーであった。しかし、自分の恋人には、かなり早い段階でカミングアウトをしていたという。これは、「吃音をもっているこんな私でも付き合ってくれますか」ということの確認であり、吃音を持っている自分を認めてほしいという承認欲求からの行動だという。またDさんは以下のように語る。

どんだけ周りが認めてくれても、自分が吃音がある自分はダメやって思っと思ったら、自分はいくら自信もてんなってというのがあって。結局自分が自分をこれでいいって思わなかったら、だめなんかなって。だって自分が自分をこれでいいって思えば、別に周りにどう評価されようが、そんなら誰でもよくなってしまおうような気がする。だから、自分の自信のなさを周りで埋めようとしても自信はつかんよねって思う。だからカミングアウトとかはあえてしようとは思わん。

このように、今現在は自分の自信のなさを他人からの承認で埋めることは無意味であるというように考

えるようになった。そのため、あえて開示する必要性は感じないという。一方、仕事ではある種の説明は必要な場合があるとDさんはいう。症状自体は可視性があるといっても、自分の得意な場面や苦手な場面等までは相手は分からない。仕事をする上で必要であれば、そのことは説明をする方が会社にとっても自分にとっても良いとDさんは考えている。

AさんとDさんに共通して言えることは、自分では難しいと思う場面・苦手な場面で開示をしているということである。

これに対して、BさんとEさんは言友会に出会って開示することに抵抗はなくなったと語っている。しかし、開示ができて、いつ誰にでも開示をするのかというと、そうとは限らない。また、そもそも吃音それ自体がスティグマを開示してしまっているところもある。例えば、Aさんのバドミントン部での経験で語られた開示は、開示であることに違いはないが、周囲の人たちはあらかじめAさんの吃音のことを分かっていた状況であった。また、高校の委員会選びも、話さなくてよいものを選んでいくことから、主人公は特に変化をしていないということが分かる。しかしこれは、一見変化していないように思えても、彼らは「吃音が露見しても大丈夫な自分」になるために変化しようとしている、もしくは今まさに変化しているとも考えられる。

したがって、伊藤(2005)が示した事例は、確かに開示のひとつの語り方として有効ではあると思うが、あくまでもひとつの語り方として捉えたほうが良いことが分かる。相互行為の<気詰まり>を回避するための手段として開示をすることはあるが、それによって「変わらぬ友情」を得たり、「やりたいことは何でもやれる主人公」になるといったような成長をしたりするわけでもなく、またその必要もない。ただ、開示も上手く使い比較的自分が傷つかない状態を保つことに主人公が自信をつけていく。このような語り方もあり得るのではないか。

このように考えると、前節で指摘した「出会い」の物語との関連について、次のように考えることができる。開示という行為は、リスクも伴う。開示をすれば否定的な声を浴びせられたり、自分にとって不利な状況になったりすることもあり得る。そのため、開示をするにはそれに立ち向かえるだけの強い自己肯定感が必要だと考えられる。そのため、セルフヘルプグループで出会う仲間から得られる自己肯定感は、開示をできるようになるために有効な手段のひとつなのである。そのため、「開示」の物語は「出会い」の物語によって支えられているという親近性があると考えられる。

第三節 「ためらいの声」との折り合いのつけ方について

この節では、伊藤（2005）の言う「ためらいの声」に焦点を当てる。「ためらいの声」とは、前向きな物語を語る中にも、どこかで吃音の「回復」への夢を捨てきれずにいる葛藤の現れである。この葛藤は、セルフヘルプグループに参加をして解決できるものではない。それでは参加者たちは、この葛藤を持ち続けて生きていかなければならないのであろうか。このことについて考察をしていく。

第一項 吃音を肯定的に語ること

調査の中で、吃音を肯定的に捉えることが出来ると語った人がいた。Eさんは言友会に出会い、活動をしていく中で、吃音は個性であり、悪いことではないと考えられるようになったという。仕事で名刺交換をする場面では、吃音によって印象づけることができ、顔と名前をすぐ覚えてもらえる、というメリットがあると語った。

また、Cさんは以下のように語った。

まあ確かにさ、大きな弱みではあると思うよ。だけど自分の心を素直に伝えられるんであったら、相手に対してかなり誠実な対応ができるのだ。相手の苦しさも絶対知らないといけないし。そういう意味で自分の苦しさをっていうのも置き換えてみるには、辛いけどさ、吃音っていうのは、でもそれもまたひとつかなど。まあ多少弱い部分をもっててもいいんじゃないかなって。

Cさんは吃音を弱みであると認めつつ、苦しさを知っているからこそ相手の気持ちを理解できるという強みになると考えている。

このように、吃音を肯定的に捉えることが出来ると語った人たちは、「回復の物語」との決別が上手くできていると考えられる。ただし、次で述べるように、Cさんの場合は仕事とプライベートでは考え方が違うため、言い切ることは難しい。

第二項 吃音者としてのアイデンティティの根深さ

Cさんは仕事では吃音があっても収益が得られれば問題はなく、吃音が返ってプラスになることもあると考えることが出来ている。その一方でプライベートでは完全に「吃音は悪くない」というように考えられてはいないという。このような複雑な思いは、伊藤（2005）の「ためらいの声」の一種として、またはそれを拡大して捉えられるだろう。このような「ためらいの声」は他にも見られる。

Aさんは言友会に通い始めて約1年弱経っており、言語聴覚士が行う練習を続けているが症状が軽くなっているとは言えないようだ。Aさん自身も吃音が完全に治るとは考えていないと語る。

治らないと思う、かな。・・・一応まあ、言語聴覚士の方がそういうのされてるのは、喋るときの不安をなくそうとか、そんな感じで。えっと・・・まあ、どもってもいいから・・・喋ってみようみたいな感じ。

そのことを理解しているながら、今でも通い続けている理由を聞くと、

ま、続ければ・・・何とかなるんじゃないかなって感じには、ちょっと期待・・・してるというか。
うん。

と語った。

Dさんは石川言友会に所属し、そこでEさんに影響を受け、吃音は悪いことではないと考えるように努めた。しかし、それは自分には合っていない考え方だと気づき、今では吃音に対して否定的な感情を抱えながらも、その感情とも上手く付き合っていくという考え方に变化した。一方で以下のような語りも見られた。

小さいころは話すことが好きやったってことを考えると、吃音によって話すことも避ける、みたいな感じになってったっていう気はする。吃音が治らないと将来どうしたらいいんやろって悩んでた。吃音さえ治ればっていうことはずっと思ってることですね。

このように、彼らにとって吃音は自分にとって否定的なものであるが故に、「回復の物語」との決別はそう簡単にできることではないのである。

Bさんは高校で良い環境に身を置けたおかげで、自分に合った話し方の工夫を身に着けることができたという。その後もどんどん吃音を上手く隠せるようになっていった。接客業を経験したり、仕事で上司に褒められたりしていく中で働くことに自信がついていったとBさんは語る。これは伊藤(2005)のいう「後景化」の物語に当てはまる。しかし、その後仕事を辞めたBさんは次の仕事を探す際、話さなくて済む仕事を無意識に探していたという。

また、Dさんの以下の語りや、Cさんの吃音は弱みであるという語りから、吃音者としてのアイデンティティを後景化させたとしても、吃音そのものをポジティブに捉えることは難しいことが分かる。

自分もどもっても気にせず話すようにしよう、と思いながら過ごしてきて、話す場面から逃げないようにしようとかね。そのころから繰り替えしてきた、頑張ってる頑張ってきた、と。でも話すときはやっぱりどもりたくないし、恥ずかしいし、なんかどもるのが人に迷惑かけてるんじゃないかっていう思いがあった。

やはり、<気詰まり>の当事者であることはまぬがれにくい。しかも、「自分の身体から発するものが原因」とあるという認識は、「流暢さは実はこだわらぬに値しない」とある程度相対化できたとしても、根絶することは難しいだろう。しかし、それでも開示や回避を上手く使いながら生きているというインタビューの語りは、「吃音を弱みとして認めて生きていく」という物語の筋が持っている可能性を示すのではないか。例え吃音者としてのアイデンティティが何らかの出来事によって後景化したとしても、症状が顕著に出してしまうと、劣等感や恥ずかしさがふと湧き上がってくることもある。そんな時、「気にしないようにし

よう」「吃音は悪いものじゃない」と考えることは、それに縛られ、精神的負担が伴うこともあるだろう。実際Dさんはこのように語った。

恥ずかしいっていう思いも持ち続けながら、話したいことは話したらいいし、無理してこうしなきゃいけないとか、前向きにならなきゃいけない、とかじゃなくて、別に恥ずかしいと思って話さん時もあるっていいし・・・こうしなきゃいけないっていう思いとか、自分を縛るようなことはやめようって、思う。

吃音を弱みであると認めることは、物語に縛られることから逃れたり、葛藤と折り合いをつけたりする方法のひとつになり得るだろう。

おわりに

第一章で、筆者が吃音者であることを開示した。実際調査を行って、このような機会はなかなかなく、何人もの当事者の物語を聞くことができたのは、本当に良かったと思う。今は開示している人でも、昔は吃音のことを話すことがタブーであると考えていた人もいた。筆者自身もそうであったため、親近感を覚えたのと同時に、自分だけじゃなかったのだと思えた。

また、Dさんの「自分を縛ることはやめよう」という発言に大きく共感した。筆者も吃音は悪いものではないと思うようにしていたが、それも精神的に負担になっていることは否定できない状態であった。そんな時にDさんの語りを聞き、「それでいいんだ」と思えるようになった。彼らのように、自分に合った吃音の受け止め方ができるようになりたい所存である。

注

(1) 言語聴覚士は、ことばによるコミュニケーションや食べることが困難な人を対象とし、リハビリテーションを行う専門職。言語障害、音声障害、嚥下障害を専門とする。1997年に国家資格となり、2018年3月の段階での有資格者は約3万1千人となっている。(日本言語聴覚士協会 2019)

(2) ことばの教室は、通級指導教室の一種である(地域によっては、言語障害特別支援学級を含める場合もある)。週1~8時間程度、主に言語障害を持つ子どもが、個別、または少人数で自立のために必要な指導を受ける場のこと。

(3) 「他者の人格を敬っているということを伝える活動」のこと。(渡辺 2003: 180)

(4) 「自分自身の人格を敬っていることを他者に示すような活動」のこと。(渡辺 2003: 180)

(5) DAF: 遅延聴覚フィードバック (Delayed Auditory Feedback) は発声とその聴覚フィードバックに時間的な遅れを生じさせるものである。マイクに向かって話した音声を時間を遅らせてヘッドフォンから再生し、自分の声を聞くことができるものである。(Wikipedia 2019)

参考文献・URL

- ・伊藤智樹, 2005, 「ためらいの声-セルフヘルプ・グループ「言友会」へのナラティブ・アプローチ-」 ソシオロジ第 50 巻 2 号 3-18
- ・井上いつか, 2016, 「吃音（きつおん）とは？吃音の 3 つの種類や症状、原因、治療法について詳しく解説！【LITALICO 発達ナビ】」 (<https://h-navi.jp/column/article/150> 2019 年 12 月 3 日取得)
- ・Wikipedia, 2019, 「遅延聴覚フィードバック」
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%81%85%E5%BB%B6%E8%81%B4%E8%A6%9A%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%90%E3%83%83%E3%82%AF> 2019 年 12 月 3 日取得)
- ・ういーすたプロジェクト, 2019, 「ういーすた——We are stutterers!——」
(<https://we-are-stutt.jimdo.com/> 2019 年 12 月 3 日取得)
- ・ゴッフマン (Erving Goffman), 1963, *stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall,
(=石黒毅訳, 1980, 『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房)
- ・高川康, 2018, 「「ことばの教室」とは？どうやって言葉を引き出すの？現役教師が語る、言葉の育ちの背景にある大切なこと【LITALICO 発達ナビ】」 (<https://h-navi.jp/column/article/35026785> 2019 年 12 月 22 日取得)
- ・全国言友会連絡協議会, 2018, 「NPO 法人 全国言友会連絡協議会 社会的支援」
(<http://zengenren.org/syakai.html> 2018 年 12 月 12 日取得)
- ・全国言友会連絡協議会, 2019, 「NPO 法人 全国言友会連絡協議会」 (<http://zengenren.org> 2019 年 12 月 3 日取得)
- ・日本吃音臨床研究会, 2019, 「知っておきたい吃音知識：吃音と上手につきあうための吃音基礎知識：吃音症状」 (https://kituonkenkyu.org/0002_001_01.html 2019 年 12 月 3 日取得)
- ・日本吃音臨床研究会, 2019, 「知っておきたい吃音知識：吃音と上手につきあうための吃音基礎知識：吃音の予期不安、場面恐怖、吃語恐怖」 (https://www.kituonkenkyu.org/0002_001_05.html 2019 年 12 月 3 日取得)
- ・日本言語聴覚士協会, 2019, 「日本言語聴覚士協会：言語聴覚士とは」 (<https://www.japanslht.or.jp/what/>

2019年12月22日取得)

・渡辺克明, 2003, 「相互行為儀礼と言語障害——〈気詰まり〉を生きる吃音者」現代社会理論研究 (13), 177-189

・渡辺克明, 2019, 「〈気詰まり〉を生きる吃音者——言語障害と相互行為儀礼」榊原賢二郎編『障害社会学という視座——社会モデルから社会学的反省へ——』新曜社, 136-151